

青 空



作・丘修三

絵・北沢優子

あの美しい青空が、とても悲しく見えることもある。
会社づとめの小森明氏も、青空を見ているとフウッと悲しくなった。そして、自分の体が青い空にすいこまれていくような不安な気持ちになるのだった。それは、小学生のころの、にがい思い出がよみがえるからだだった。

その日はスカッと晴れ、真つ青な空が広がっていた。

明はウキウキした気分で自転車をまたいだ。

半年もかけてためたおこづかいで、ほしかったゲームソフトを、となり町まで買いにゆくのだ。

「お母さん、お昼いらさないからね」

「お昼、どうするの？」

「町でバーガーを食べる。ハンバーグが二枚入ったやつ」

「あら、いいわね。いつてらっしゃい。あ、まって、まって。お昼代、お母さんが出してあげる」

そういつて、お母さんはサイフから千円札を出して、明のジャンパールのポケットに入れてくれた。

「やった！ ありがと」

「いつてらっしゃい。車に気をつけるのよ」

グイッとペダルをふみこむ。となり町まで七、八キロだ。ずつとほしかったゲームソフトを買って、お昼はハンバーグを二枚重ねたビッグなバーガーを、フライドポテトとコーラで、ガラスごしに通りをながめながら食べる……そう決めていた。

ペダルをふむ足が、ついつい速くなる。

風は冷たかったが、口笛でも吹きたい気持ちだった。